

白山ふるさと文学賞

第三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 最優秀賞

空をつないで

北星中学校二年

長谷部 はせべ

瑞季 みずき

「…でさー、リレーでさー、お前が一気に抜いたんだよな。」
「ナイス！すごいよ。」

運動会が終わり、汗だくの小学生三人は教室の中に入った。燃えるような太陽が照りつけるグラウンドとは違い、教室の中は心なしかひんやりとしているように思える。そんな教室で運動会の優勝を祝い、思い思いに喜びを表現している二人とは裏腹に、僕はただ一人どんよりと疲れた顔をしていた。

走るのなんて大嫌いだ…。

小さい頃から走るのには速い方だったと思う。でも、得意だとは思っていない。むしろ疲れるし、足が痛くなるから嫌だった。周りから

「すごい！」
とか

「どうしてそんなに速く走れるのか教えて。」

とか言われても全然嬉しくない。中学に入っても陸上だけはしない…そう決めていたが、入学して何をしようか悩んでいる間に部活動見学の日がきてしまった。

サッカー、バスケット、野球…と誘われるままに見学した。友達の悠はりのりで見学していたが、僕だけは気が乗らなかつた。

「お前さ、チームでやるスポーツやらないの。」
悠が聞いた。

「やらない。自分が失敗したら全員の責任になるし、他の人の責任を負うのも嫌だ。」

面倒くさそうに僕は答え、文科系の部のコーナーへ向かおうとした時、悠に

「待てよ。」

と呼び止められた。

「お前さ、足速いんだから入ってみろよ。陸上部。」

悠に無理矢理手を引っぱられ、僕は仕方なく陸上部をのぞいた。

ハードルを並べて練習している人、走り幅跳びをしている人、ランニングをしている人。ありとあらゆる陸上競技がグラウンドで行われていた。

「うわあ、陸上競技ってこんなにあったっけ。」

悠は、目を輝かせながらあちこち見て回っている。その後ろで、僕はやっぱりつまらなそうな顔をしていたが、内心種目の多さに驚いていた。陸上競技ってこんなにあったっけ。間近で見るのは初めてだ…。

それから、悠に手を引っぱられながら見学を続けていると、一人だけ練習をしていない先輩に気づいた。先輩はみんなに、

「おい、そろそろ休んだら？」

と声をかけ、慣れた手つきで飲み物を配ったり、備品を片付けたりしていた。誰だろう。部のTシャツを着ているけど練習をしないのかな…。

僕がそう思いながらじつとみつめていると、その視線に気付いたのか、先輩は、

「やあ、もしかして一年。」

と笑顔で声をかけてきた。胸には「安藤」と名札が付いている。

「はい…。」

「ゆっくり見学して行ってね。」

それだけ言うと、その先輩は、また片付けに戻っていった。その背中が少し寂しそうに見えたのは僕だけだろうか。

全ての部活の見学を終え、教室に戻ろうとすると、悠が後ろからついてきて言った。

「ほら、先輩も優しそうだったじゃん。やっぱりお前、陸上部入れよ。」

「うん…そうだな…。」

こうして、僕は陸上部に入ることになった。他の部を見ていると、やはりチームプレイはきつそうだったし、悠から「入れよ。」と何度も勧められ断りきれなくなつたこともあった。そして、何より優しそうで、どことなく寂しそうな先輩の笑顔が心に残っていた。

僕は、顧問の先生の勧めもあって、長距離を選んだ。トラックやロードでのタイムがまあまあだったし、何より長距離を専門にしている部員は少なかった。長距離は心の底ではあまり気が進まなかったが、他の競技をしている先輩やほかの同級生達と共に、何となく練習を重ねていった。しかし、安藤先輩だけは変わらず飲み物を用意したり、備品の整理をしたりグラウンドの隅の花の水やりや草むしりをしているだけだった。僕は気になって聞こうとしたが、いつも笑顔で

「これが僕の基礎練習だからね。」
と返されるばかりで、とりあつてもえなかった。

その後、新人大会や地区大会もあったが、言われるがままそこそこの練習をこなすだけの僕は、どの大会もそこそこの成績で終わった。僕自身も、自分にそれ以上のものを期待していなかった。

それからしばらくたって、先生が部員全員を呼び出して言った。
「もうすぐ県の中学駅伝予選会があるので、この中から選手を決めたいと思う。」

みんながざわついた。

「誰だ？」

「やっぱり持久力のある奴だろ。」

あちこちから声が聞こえてくる。

「今回の駅伝に出るのは、三年……。」

先生の口から名前が次々と読み上げられていく。僕はどうでもいいや……
と思ひ、うつむいてグラウンドの土をいじっていた。

「一年、……以上だ。」

ぼくはぎよつとした。そして、大きな落胆があった。部活なんてここそこに練習をし、そこそこの結果をだせばいいと思っていたのに、いきなり自分が選ばれたのだ。しかも駅伝。チームプレイが嫌だったから陸上部を選んだのに……。僕は

「あの、先生、他の先輩に……。」

そう断ろうとしたが、先生の

「まあ、しっかりやってくれ。」

という言葉にさえぎられ、気が重いままその日の部活が終わってしまった。

「おい、どうしたんだー。顔がなんか暗いぞ。」

ジャージ姿のままバッグを持って帰ろうとしたら、後ろから悠に声をかけられた。ゆううつなのが顔に出ていたようだ。悠は、まだ部活の途中らしくバスケットボールを抱えている。元気だし、誰とでもすぐに馴染める彼はバスケット部に似合っているな……と僕は思った。

「どうしたんだ。お前、やっぱり何かあったの？」

悠は僕の顔をのぞき込んだ。僕は、黙って帰ろうとしたが、「おい、おい」と何度も声をかけてくるのであきらめて言った。

「駅伝の選手に選ばれてさ。面倒くさいのに。」

悠は

「いいなあ。俺なんてまだ補欠だぜ。おまけに、一年だから体育館掃除とかボールみがきとかしないといけないしさー。」

と本気でうらやましそうだった。その言葉を聞いて、僕の頭には安藤先輩の顔が思い浮かんだ。何故先輩が練習しないのか、先輩なのに雑用を全部引き受けているのか、また気になったが考えてもきりが無い。僕はそのまま帰路についた。

次の日、駅伝の練習に気のすまない僕はランニングの途中で歩いたり、休んだりしていた。すると、いつもは水やり等をしているはずの安藤先輩が側に来て、

「ほら、ファイト。」

と声をかけてくるのだ。何故だろう。先輩、急に声をかけ始めたよう……僕はまた走り始めた。

それから何事もなく毎日が過ぎた。僕は仕方なく駅伝に出ることを受け入れ、しぶしぶ練習をこなしていた。そしてそんな僕に対して、安藤

先輩はからわず声をかけ続けた。

その日は、いつもより早く目が覚めた。学校についても時間をもて余して、僕の足は何となくグラウンドに向いていた。

そこで、僕は意外な光景を見た。いつも絶対走らなかつた安藤先輩が走ってる。先輩は、完璧なフォームでスタートラインにいた。空を見上げて大きな深呼吸をひとつした後、まっすぐな瞳で前だけを見すえ、先輩は走り出した。なんてきれいなフォームなんだろう。そう思ったのもつかの間、先輩は十メートル程で走るのをやめてしまった。

「先輩、すごくきれいなフォームなんですわね。」
僕は思わず声をかけていた。

「あれ、見てたんだ。」

先輩は少し驚いた表情をした後、

「ありがとう。今はこれだけしか無理だけど手術をうければもつと走れるようになるから。」

と続けた。「手術」、僕は胸が押しつぶされるようなショックを受けた。そして、そんな大変なことをまるで世間話をするかのようにさらっと話す先輩に戸惑っていた。

放課後の部活の時間になつても、僕はずっとそのことを考えていた。いつも近くにおいて声をかけてくれた先輩が急に遠くに行ってしまった気分だった。

「おう、どうしたんだ。今日、元気なかつたぞ。」

部活が終わった後、田中先輩が僕のもとへかけ寄ってきた。僕は少し悩んだが、思い切って聞いてみた。

「あの、今朝聞いたんですけど、安藤先輩が手術するって本当ですか。」

「ああ、本人から聞いたんだ。」

僕がうなずくと、田中先輩は、少し迷った後話し始めた。

「あいつは、昔から走ることが大好きだった。小学校でもマラソンやリレーは誰にも負けたことがないと思う。夢は大学駅伝に出ることだった

言つてたよ。もちろん、部でも頑張つてた。お前と同じ長距離専門で期待もされてた。でも昨年交通事故にあつて。よりよつて左足に後遺症が残つて、全力で走るとかなり痛むらしいんだ…。手術をしても陸上の選手としてやっていけるかは五分五分らしいし、リハビリも必要だ。でも、あいつはあきらめたくないから手術をうけることに決めた。だから、今はマネージャーみたいなこととして頑張つてる。自分が足をかばいながら走ったりしたら、みんなの気持ちひいてしまうから普段は絶対走らないけど、朝誰もいないグラウンドで、昔の感覚を忘れないように走れるようになる姿をイメージすることで、自分の気持ちを支えてるんじゃないかな。」

「そうだったんですか。」

僕がうつむいていると、

「お前、あいつと同じ長距離専門だからな。思い入れもあるんだろう。だから声かけとかもしてたんじゃないかな。」

僕は、今朝の安藤先輩の姿を思い出していた。どうして今までそこそこの練習しかしてこなかったのか、そんな自分で満足していたのか、声をかけてもらつても無視していたのか、考えるとても情けなかつた。そして、顔を上げることができなかつた。

「あいつは大会に出ることはできない。だから、部員みんなであいつの思いをつないでいこうな。練習も大変になるけど頑張ろうな。」

田中先輩はそう言うのと、ポンツと軽く背中をたたいた。僕にはその言葉が

鐘のように響いていた。

それから、何日も厳しい練習が続いた。今までの僕ならここでやめていたかもしれない。けれど、先輩達の後押し、そして、何より僕自身の意志でどんな練習も乗り越えていった。

いよいよ大会当日。僕はいまだに自分が選ばれたこと、そして、自分が練習してきたことへの自信がもてないでいた。沿道には友達達の悠や選

手に選ばれなかった部員のみんな、そして地域の人たちも集まっていた。僕は、観客全員が自分を見ているような気がして胸が痛くなった。大丈夫なのかな。こんな自分が選ばれて……。そう思っていると、自分の心を見透かしたかのように、後ろにいた安藤先輩が肩をたたいてきてこう言った。

「お前ならできる。」

先輩はたったひと言しか言わなかったけど、僕は少し楽になれたような気がした。

大会が始まった。僕はアンカー区間を走ることになっていた。僕の中学は先頭集団についていたが、この辺りで一番の競合は、更にその前を走っていた。

前から田中先輩の走ってくる姿が見えた。息をきらして汗だくだ。僕は、あの時の安藤先輩のように空を見上げて深呼吸をした。

いよいよたすきが僕へ回ってきた。みんなの汗が、思いが込められたたすきをかけ、僕は走り出した。テレビで見える駅伝とは違い、前とはずつと距離感があるように思える。僕とは大体十秒差くらいだろうか。追いつこうとすると相手も逃げ、相手が逃げたら追いかける。近くて遠い存在だ……と僕は思った。ここで全力を出せば追いつけるかもしれない。でも、今、力を出しきってしまったら、後で追い抜かれてしまうかもしれない。このまま二位で終わってもいいか。そう思った時

「あきらめんなー。お前ならできるー。」

沿道からひと際大きな声が飛んできた。あまりの声の大きさに僕がふり向くと、そこには安藤先輩と悠がメガホンを持って立っていた。二人共声がかすれている。きつと僕が来るまでずっと応援し続けてくれていたのだろう。みんな、ありがとう……。

足を大きく踏み出した。足が、全身が前に出て風を切る。もう何キロ走っただろうか。息切れがする。途中で咳込んだりもした。でも少しずつ、確実に、僕の身体は前を走っている選手の背中へと近づいていた。

最後まであきらめない。先輩の分まで走り抜く。足よ、動け。前に、もつと前に。僕は前へと進んでいった。相手との距離は確実に縮まっていた。と同時に、心で、身体で、そして自分のすべてで僕は走ることに楽しさを感じていた。

汗が僕の頭から首をつたい風で流される。もう少し、あと二メートル、一メートル……。そして、

「並んだぞ。」

「いけー。」

僕は相手に追い着いた。そして、並んだ。相手の息づかいを感じ、汗だくの苦しい表情が見えた。瞬きをする度に、汗が目に入って痛かった。相手はかなり疲れてきているのだろう。一瞬ふらついた。それを見計らい、僕は足を踏み込んだ。まるで、電車に乗っているかのように景色が通り過ぎた。もう、自分の前には誰もいない。そして、それからは急に身体が軽くなったように僕は走り抜けた。観客達の声援も景色も、僕の中にはもう何も入ってこなかった。ただ走っていた。

沿道の声援が一際大きくなり、道に沿って左に曲がったその時、僕の中には白いゴールテープが映った。自分でも、もう疲れているのかいなのか分からない。ゴールテープの向こうには、顧問の先生や先輩達の姿が汗でぼやけて見えた。僕は、ただただ足を前へと進め、ゴールテープを切った。みんなの笑顔と温かい拍手に、僕は包まれた。

大会が終わって帰ろうとした時、安藤先輩が声をかけてきた。

「おめでとう。今まであきらめずに練習してきたよ。期待してる。」

先輩はそう言って、手に持っていたバッグの中からジュースを一本投げ渡すと、他の先輩達と一緒に帰っていった。まだ自分は汗だくだったし、ジュースは少しぬるくなっていたけど、その時飲んだその味は何か特別で、ずっと忘れないような気がした。

あれから七年。

僕は、再びスタートラインに立っていた。

中学のあの大会から、僕は毎日走り続けた。走っていくうちに、自分と地面が一体化するかのようになり、軽やかに一步を踏み出せるようになっていた。将来の夢もできた。走っていくうちに、いつしか他を超えたい、自分の走りをしてみたいと思うようになり、自ら志願しているいろいろな大会に出た。すると、少しずつ満足する結果が得られるようになった。

周りのことも見えるようになった。他の部員がケガをした時には進んでサポートをした。練習をこなしつつ、備品の整理や草むしり、飲み物の準備等、マネージャー的な仕事もこなした。その姿を風の噂で聞きつけて取材に来る記者もいたが、決まっ

と答えた。「当たり前のことをしていただけです。これは僕の基礎練です。」

そして、今日。いよいよ僕の大学駅伝デビュー戦だ。中学の時の部員のみんなが応援に来てくれていた。

「頑張っ

「お前なら

僕は笑顔でうなずいた。

スタートの号砲が鳴った。

僕は、アンカー区間の六区で待つ。青空を見上げ、大きく深呼吸する。そして、向こうからたすきをかけ五区を走ってくるのは、あの安藤先輩だ。

たすきを取り、右手に握りしめる。その手を高くつき上げ僕に合図を送る。もうすぐだ。僕はありったけの声でエールを送った。

「先輩、フ

